

2022年1月9日（日）上演⑧

神奈川県立岸根高等学校

「#私のマスクの外し方」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

網 寧々花（東京都国立学芸大学附属高等学校2年）

今を生きる私たち一人一人の不安や恐怖感を代弁し、改めて「今を生きること」について考えさせられた作品であった。

新型コロナウイルスの感染拡大により、入学直後からオンラインでの学校生活を余儀なくされた高校一年生。この作品では、彼女たちのコロナへの向き合い方が「リアル」に描かれていた。

この作品の最大の魅力は“視覚に訴える”表現である。目に見えない SNS の表現にはひとときこだわりが感じられた。特に、アプリの違いは椅子やホリゾントの色が用いられており、一目見て観客は気づかされる。椅子を置く、というのは立ち位置の固定につながってしまいがちだが、要所所で舞台に流れが生み出されていて、飽きずに観られる工夫も感じられた。

加えて、役者のジェスチャーも巧妙に SNS を取り込んでいた。オンライン上で先生の画面が止まったり、音が聞こえない動きもコミカルで素敵で表現であった。何よりいいねの「逆」のポーズには鳥肌が立った。口ではプラスな「いいね」を言っているのに体から嫌悪感が出ていてゾッとさせられた。途中で挟まる SNS の書き込みの言葉もシルエットだけが印象的に映し出されていて、その匿名性が上手く表現されていた。文字が書いてある半紙を書き込みとしてばらまいて、最後オンラインからオフラインへと場転していく時に回収するのも見ていて気持ちの良い演出だったように感じた。

また、そんな SNS を通じた二人の関係性の変化は共感できるものばかりであった。講評委員の中で、仲が戻る時の表現に少しだけ違和感を覚えたという意見も出て議論になったが、それだけみんなが自分を投影しやすかった、60分間この作品に没頭した証拠だと感じた。

「新型コロナウイルス」をテーマにした劇というのは最近では珍しくはないが、「コロナで得たもの」について描かれているのは新鮮でとても考えさせられた。現代を生きる高校生にとってコロナで失ったものは山程あると思う。しかし、せつかくなれば『今』を楽しもうと明るくなれる、前向きで背中を押してくれるような作品だった。この劇が存在し、そして私が見ることができたのも「コロナで良かった」ことだ。



神奈川県立岸根高校演劇部の皆様、素晴らしい劇をありがとうございました。